難題残し進む「中間貯蔵」

今日で「3・11」福島第一原発事故から9年になる。「復興」という言葉の一方で、厳しい現実がある。写真は朝日新聞3月5日朝刊特集。原発事故の厳しい現実を抜粋して紹介する。

リードから―東京電力福島第一原発事故では、放射性物質で広大な土地が汚染された。除染作業で出た福島県内の汚染土が今、原発を囲むようにつくられた「中間貯蔵施設」に集められている。総事業費1兆6千億円の巨大事業は、搬入開始からまもなく5年を迎える。

福島県沿岸部を南北に貫く国道 6 号。大熊町の道路沿いに中間貯蔵施設を紹介するPR拠点がある。2月20日、記者を乗せた見学用バスは、その裏手から施設の敷地に入った。更地になった集落跡などを横目に7分ほど。標高40㍍ほどの展望台に着いた。目の前に広がるのは台形の巨大な「穴」。現在、敷地内に7カ所ある「土壌貯蔵施設」の一つだ。穴の大きさは奥行きが約800㍍、横幅はおよそ200㍍。深さは約30㍍ある。底とのり面は遮水シートが重ねられていた。ここが、県内から集められた汚染土が行き着く場所だ。

汚染土はベルトコンベアーやダンプカーによって、穴の底まで運ばれていた。それをショベルカーなどでならし、固めていく。汚染土は最終的に穴の底から約15㍍の高さまで積まれ、約140万立法㍍が埋め立てられるという。

中間貯蔵施設は、汚染土や放射性廃棄物を処理・一時保管するエリアのことだ。広さは東京ドームの約340倍にあたる16万平方㌔メートル。双葉、大熊両町にまたがり、第一原発を囲むように広がっている。原発事故後の除染作業ではぎ取られた土は、汚染土として県内の仮置き場や校庭、公園、家の軒先などに置かれた。その数はピーク時で約15万カ所に及んだ。そのため、まとめて保管する中間貯蔵施設が必要となり、政府が建設を持ちかけた。土壌貯蔵施設の近くに巨大な白いテントが見えた。埋め立てる前の段階の「受け入れ・分別施設」だ。フレコンバッグと呼ばれる汚染土が入った黒い大型の袋（約1立方㍍）を破り、土をふるいにかけて、草木や石を取り除いていく。

最終的に貯蔵する汚染土は、東京ドーム11個分の約1400万立方㍍を見込む。これまでに4割超の約615万立方㍍(2月20日現在)が運び込まれた。搬入はピークを迎え、19年度は前年度の2倍の400万立方㍍。現在、1日平均のべ約3千台のダンプが県内各地から汚染土を運んでくる。敷地内で働く作業員は1日あたり約5千人。ダンプの運転手らを含めると、約9千人が働く。20年度も同じ400万立方㍍を運び入れ、21年度までに搬入を終える計画だ。

（2020年3月11日）